千葉市立木南（たちきみなみ）遺跡

－ 令和３年度発掘調査報告書 －

2023

株式会社　拓匠開発
千葉市教育委員会
株式会社　勾玉工房

例　言

1. 本書は千葉県千葉市若葉区加曽利町 954-3 他に所在する、立木南遺跡発掘調査報告書である。
2. 調査は、千葉市教育委員会が主体となり、土地所有者の委託を受けた有限会社 勾玉工房 Mogi（現：株式会社勾玉工房）がこれを支援した。
3. 調査期間及び組織は下記のとおりである。

調査期間　令和 3 年 10 月 25 日～令和 3 年 12 月 10 日
調査主体者　千葉市教育委員会
調査担当者　白根　義久　埋蔵文化財調査センター
調査支援　有限会社勾玉工房 Mogi（現：株式会社勾玉工房）　代表取締役　大賀　健
発掘作業　調査員　篠原　正　調査研究員・日本考古学協会会員
大賀琢磨　調査研究員・埋蔵文化財調査士補
整理作業　調査員　谷　旬
作業員　佐藤政代　篠原みよ子　篠原仁史　橋邊明子　高橋　豪

4. 遺物の水洗いはすべての遺物に対し行い、全量の重量を求めた。また注記は注記マシーンを用い、微細なものはビニールに入れて表記した。
5. 周辺の遺跡図 1/25,000 は国土地理院発行図『蘇我』『千葉東部』を、遺跡地形図 1/2,500 は千葉市発行の都市計画図を用いた。
6. 掲載図面は以下の縮尺で行った。
遺構図は 1/30・1/60、遺物は土器・土製品 1/3、鉄製品
7. 掲載図面に用いたトーンは以下のとおりである。

遺構　…攪乱　…焼土範囲　…火床面
遺物　…須恵器断面

8. 整理作業における遺物の接合及び補強材については、セメダイン C、及びエポキシ系樹脂を用いた。
9. 発掘調査に係るすべての遺物は掲載・未掲載別に収納箱に入れ、台帳・図面・写真類とともに千葉市埋蔵文化財調査センターが保存している。
10. 本書の執筆は谷　旬、大賀琢磨が行った。
11. 発掘調査から整理調査に至るまで下記の方々諸機関にご指導を賜った。以下に記して謝意を表すものである。（順不同・敬称略）

カメラのスギハラ

目　次

例　言　目　次
第１章　調査に至る経緯と経過
第１節　調査に至る経緯……1
第２節　調査の経過……1
第３節　調査の方法……2
第２章　地理的・歴史的環境
第３章　検出された遺構と遺物
第１節　竪穴建物跡……5
第２節　土坑……21
第３節　遺構外出土遺物……21
第４章　まとめ

表 目 次

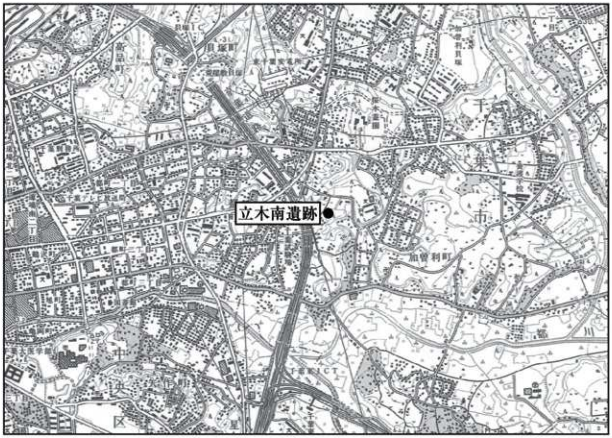
第１表　SI01 出土遺物観察表……9
第２表　SI02 出土遺物観察表……12
第３表　SI03 出土遺物観察表……14
第４表　SI04 出土遺物観察表……19
第５表　SI05 出土遺物観察表……20
第６表　遺構外出土遺物観察表……22

挿 図 目 次

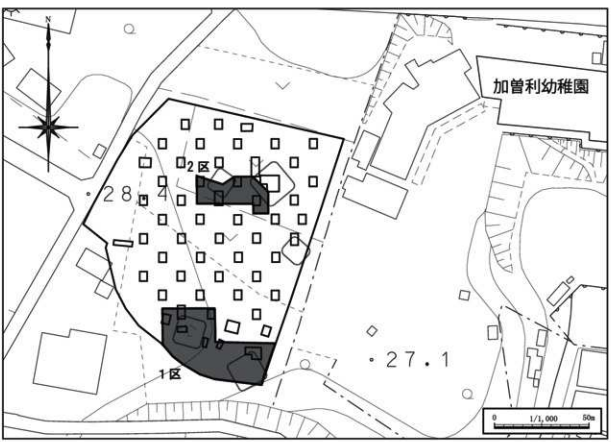
第１図　遺跡位置図
第２図　確認調査トレンチ配置図及び本調査範囲
第３図　調査風景……1
第４図　調査の方法１……2
第５図　調査の方法２……2
第６図　基本層序……2
第７図　周辺遺跡図……3
第８図　全体測量図……4
第９図　SI01……6
第10図　SI01 竈……7
第11図　SI01 出土遺物１……7
第12図　SI01 出土遺物２……8
第13図　SI02……10
第14図　SI02 出土遺物……11
第15図　SI03……13
第16図　SI03 掘方……14
第17図　SI03 出土遺物……15
第18図　SI04……17
第19図　SI04 出土遺物１……18
第20図　SI04 出土遺物２……19
第21図　SI05・同出土遺物……20
第22図　SK01……21
第23図　遺構外出土遺物……21

図 版 目 次

図版 1 ……1. 1 区完掘状況　上が南
2. 2 区完掘状況　上が北
図版 2 ……1. SI01　完掘状況　南から
2. SI01　A セクション　東から
3. SI01　B セクション　北から
図版 3 ……1. SI01 竈　完掘状況　南から
2. SI01 竈　B セクション　南から
3. SI01-P1　完掘状況　西から
4. SI01-P2　完掘状況　西から
5. SI01　掘方完掘状況　南から
図版 4 ……1. SI02　完掘状況　南から
2. SI02　A セクション　東から
3. SI02　B セクション　北から
図版 5 ……1. SI02　検出状況　北から
2. SI02　炉　完掘状況　西から
3. SI02-P1　完掘状況　西から
4. SI02-P6　完掘状況　西から
5. SI02 床下ピット完掘状況　南から
図版 6 ……1. SI03　完掘状況　南から
2. SI03　A セクション　東から
3. SI03　B セクション　東から
図版 7 ……1. SI03　検出状況　西から
2. SI03　遺物出土状況　南から
3. SI03-P3　A セクション　西から
4. SI03-P4　B セクション　西から
5. SI03　掘方完掘状況　東から
図版 8 ……1. SI04　完掘状況　東から
2. SI04　A セクション　南から
3. SI04　検出状況　南から
4. SI04　掘方完掘状況　東から
図版 9 …… 1. SI05　完掘状況　東から
2. SI05　遺物出土状況　東から
3. SK01　完掘状況　東から
4. 1 区基本層序　東から
5. 2 区基本層序　東から
図版 10 …… SI01 出土遺物
図版 11 …… SI02・03 出土遺物
図版 12 …… SI03・04 出土遺物
図版 13 …… SI04・05 出土遺物
図版 14 …… 遺構外出土遺物



第１図　遺跡位置図



第２図　確認調査トレンチ配置図及び本調査範囲

第１章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

令和３年３月２日付けで、個人事業者から、千葉市若葉区加曽利町 947 番２他について、宅地造成に伴う「埋蔵文化財発掘の届出について」が千葉市教育委員会教育長あてに提出された。事前の試掘調査で竪穴住居跡を確認していることから同年３月 15 日付け２千教埋セ第 501 号にて、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。その後、北側隣接地の同 955 番３の一部について令和３年５月 25 日付けで「埋蔵文化財発掘の届出について」が追加で提出され、同年５月 26 日付け３千教埋セ第 92 号にて、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

その後、事業者より対象地（実測面積 3,366.83 ㎡）について「埋蔵文化財発掘調査について（依頼）」が提出され、同年６月９日付け３千教埋セ第 94 号にて千葉県教育委員会教育長宛て報告し、同年６月 16 日～６月 29 日の日程で千葉市埋蔵文化財調査センターが確認調査を実施した。

その結果、古墳時代住居跡などが検出されたため、同年６月 29 日付け３千教埋セ第 155 号にて、調査面積のうち、856 ㎡を本調査対象範囲として継続協議が必要の旨、事業者宛に通知した。

再度協議の結果、本調査対象範囲のうち造成工事により遺構に影響がある 470 ㎡について記録保存のための本調査を実施し、その他の 386 ㎡については保護層を設け現状保存することとなった。本調査は、令和３年 10 月 18 日付けで、土地所有者より、「埋蔵文化財発掘調査について（依頼）」が提出され、依頼者の委託を受けた有限会社勾玉工房 Mogi の支援のもと、千葉市教育委員会が主体者となり、同年 10 月 25 日から 12 月 10 日まで発掘調査を実施した。

第２節　調査の経過

現地における作業は令和３年 11 月２日から令和３年 12 月 10 日まで行われた。

11 月２日　設定された調査区内への安全柵の設置、駐車用地の整備を実施、その後 0.45 ㎡級のバックホウによって１区表土の掘削を開始する。

11 月５日　重機による表土除去と機材搬入を完了する。

11 月８日　テントの設営。人力による遺構確認作業の開始。

11 月 10 日　１区より検出された、「SI01」・「SI02」の精査を開始。

第３図 調査風景

11 月 16 日　２区表土除去を再度行う。

11 月 19 日　２区「SI03」・「SI04」の調査を開始する。

11 月 23 日　SI02 は当初、方形の遺構と認識していたものが、精査を進めるにつれ、楕円形の建物跡であることが判明する。

12 月１日　１区・２区で遺構と遺物の測量を行う。

12 月３日　建物跡の掘方調査を開始する。

12 月９日　再度測量を行い、作業員作業を終了する。

12 月 10 日　調査完了。

第３節　調査の方法

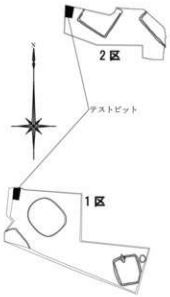
発掘調査　便宜上南側調査区を１区、北側調査区を２区としバックホウを用いた表土除去を２区から11月２日から11月５日までの３日間で行った。

しかし、２区においては、微細な焼土と細かい土器片が確認された事により、予定より上面で重機による掘削を終了していた事が判明し、11月16日に再度重機による表土除去作業を行った。表土除去後は、人力による遺構確認作業を行い、１区では竪穴建物跡３棟と土坑１基、２区では竪穴建物跡２棟を検出した。

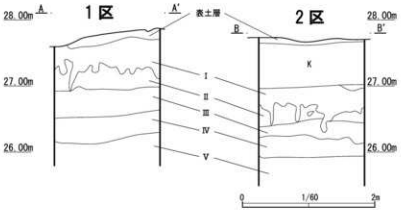
両調査区の西壁部分に遺構の存在しないことを確認した後に、土層観察用のテストピットをバックホウを用いて掘削した。

確認された遺構の掘削作業には、移植コテを用いて遺構を北東部から時計回りに１～４区と区画し上層・中層・下層・床面直上の４段階に分けて、上層より調査を行った。

検出された遺物については、残存率の高い遺物と遺構の時期判定に関わる遺物をのぞき、段階ごとに一括採取した。残存率が高く、遺物の帰属時期の明らかな遺物に関しては、トータルステーションを用いて出土位置を３次元的に記録した。

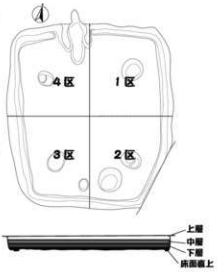


第４図　調査の方法１



第６図　基本層序

Ⅰ層　10YR3/4暗褐色土　しまり粘性あり
Ⅱ層　10YR4/4褐色土　しまりあり粘性弱い
Ⅲ層　10YR5/6黄褐色土　しまりあり粘性なし
Ⅳ層　10YR6/4明黄褐色土　しまりあり粘性なし
Ⅴ層　10YR4/3にぶい黄褐色土　しまりあり粘性なし



第５図　調査の方法２

整理作業　遺物は水洗い洗浄後に、注記専用マシーンによって注記した。遺物トレースはAdobe Illustrator CS4を、写真撮影はデジタルカメラ2400万画素を用いて実施した。また拓本・デジタル写真の修正にはAdobe Photoshop CS4を用いている。遺物の接合にはセメダインＣを、補修部分には樹脂材バイサムを用い補填した。遺構図面は修正加筆の後に、Adobe Illustrator CS4を用いてトレースしている。編集作業は、Adobe InDesign CCを用いて実施した。

第２章　地理的・歴史的環境

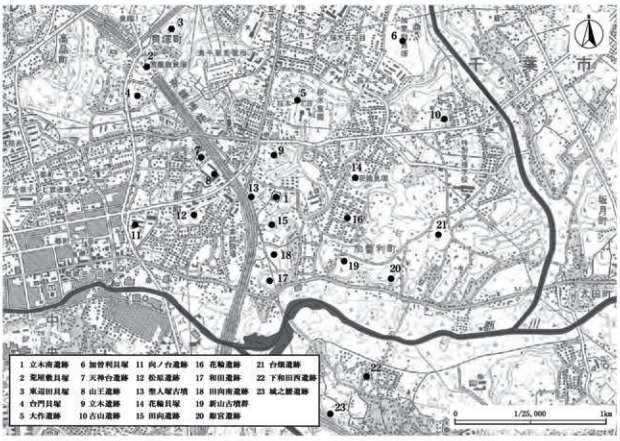
今回の調査地は、加曽利幼稚園の敷地の西側に位置し、千葉市加曽利町 954-3 を代表地番とする。立木南遺跡では昭和 60・61 年度、平成３年度、平成５年度、平成７年度に発掘調査が実施されている。これらの調査地とは基本的に同じ台地上に位置し、遺物等の採集状況等からも遺跡としての連続性をもつと考えられる。

調査地は、都川の支谷に面する台地の緩斜面を対象とした。

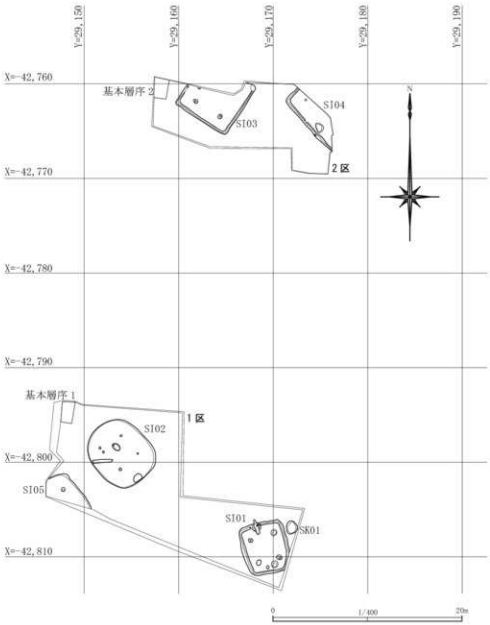
都川は千葉市東南の誉田付近に水源をもち、市街地を東西に横切って東京湾へ注ぐ市内有数の河川である。多部田方向から西に下る都川の本谷は、市街地にさしかかる手前の星久喜の付近で、鎌取方向からの支谷と合流する。この合流部のほぼ真北に、小さく北上する支谷があり、この支谷に突き出した標高 27 ～ 30 m の舌状台地上に遺跡は立地する。

立木南遺跡の調査がなされた台地はこの舌状台地東側縁辺部に立地しており、昭和 60 年度の調査では遺跡の東側、平成３年度・平成５年度の調査では北側、今回調査は南側緩斜面をそれぞれ対象としている。過去調査では、旧石器時代の石器集中地点や、古墳時代前期～平安時代の竪穴住居跡群・掘立柱建物跡群、当該期の土器群・鉄製品・鉄滓片などが検出されている。なお、縄文時代前期後葉～後期後葉までの土器片が少量出土しているが、現時点では、当該期の遺構は発見されていない。

【引用・参考文献】
倉田義弘・田中英世・菊池健一　1988『立木南遺跡』千葉市教育委員会・（財）千葉市文化財調査協会
永塚俊司・鈴木眞友美　1996『立木南遺跡』千葉大学文学部考古学研究室
千葉市埋蔵文化財調査センター　2020『埋蔵文化財調査（市内遺跡）報告書－令和２年度－』



第７図　周辺遺跡図


Y=29,150
Y=29,160
Y=29,170
Y=29,180
Y=29,190
X=-42,760
X=-42,770
X=-42,780
X=-42,790
X=-42,800
X=-42,810
基本層序 2
SI03
SI04
2 区
N
基本層序 1
SI02
1 区
SI05
SI01
SK01
0
1/400
20m

第 8 図　全体測量図

第３章　検出された遺構と遺物

本調査で検出された遺構は弥生時代竪穴建物跡２棟、古墳時代竪穴建物跡３棟・土坑１基である。遺物は縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器、土製品（支脚）、石製品（石皿）などが出土しており、総量32,994.9g、整理箱で14箱である。以下、竪穴建物跡・土坑番号及び遺構外の順に記載する。

第１節　竪穴建物跡

・SI01（第９図　図版２～３）

位置：南調査区東隅に位置し、SK01と近接する。重複関係：単独。

平面形：隅丸長方形を呈す。主軸方向：N-15°-W　規模：主軸長552 cm・横軸長497 cmを測る。

壁形態：ほぼ垂直に50 cmほど立ち上がり、壁下全面に幅15 cm～20 cm、深さ5 cmほどの浅い溝が竈下を除いて廻る。

床構造：壁際を除き、ほぼ全面に硬化面が認められる。

柱穴：主柱穴は正方形に配置される。各芯々間距離 P1-P2:255 cm・P2-P3:250 cm・P3-P4:250 cm・P4-P1:245 cm。P1～P4 は径 50～70 cm内外の平面円形を呈し、P1・P3・P4は深さ40 cm前後を測る。P1・P2からは炭化物が検出された。また、竈に対面するP5は梯子穴に相当する。

貯蔵穴：南壁下やや右寄りに位置する。74 cm× 70 cm・深さ37.5 cmの平面円形である。

竈：北壁中央部よりやや西側に位置し、主軸長126 cm・幅99 cmを測る。左袖幅は41.7 cm、右袖幅は27.6 cm、砂質粘土によって構築される。火床面は厚く、やや左袖寄りに土製支脚が設けられる。

覆土：暗褐色土主体の自然堆積、ロームブロックを含む埋め戻し土の順番で堆積する。

遺物出土状況：竈上で４，同内で11を、床面直上で９・10など完形に近いものを検出した。また、埋め戻し土に混り浮いた状態でも多数の土器片が出土した。

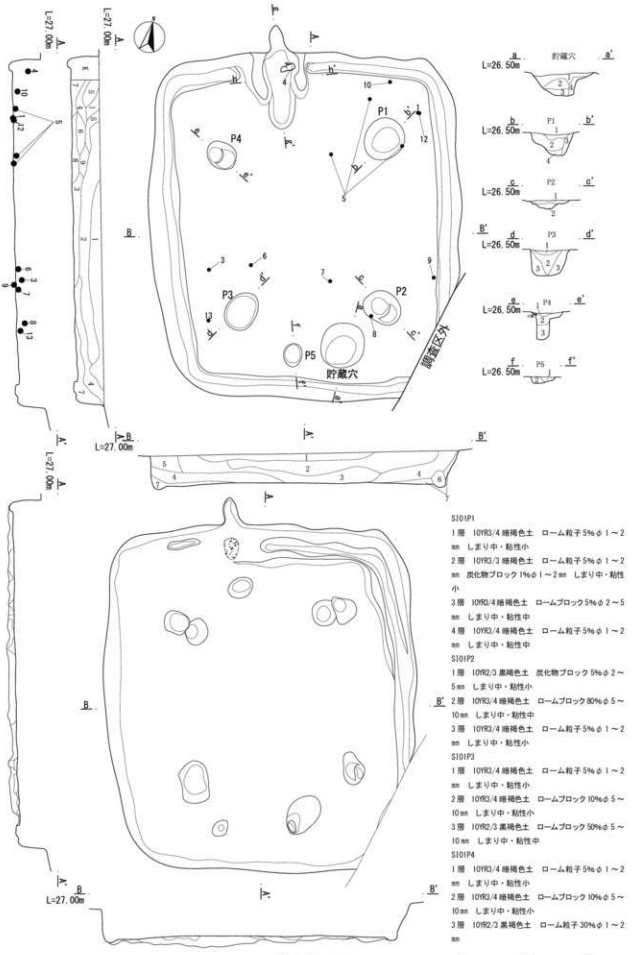
遺物各説：土師器５点（甑１・甕３・壺１）・須恵器４点（瓶類２・蓋１・坏１）・土製品３点・石製品１点を掲載した。１は口径32 cm、寸胴・単孔の甑である。２も甑の可能性が高い。３・４はやや長胴化し始めた甕であろう。５は「く」字口縁・球形の胴部・突出した底部をもつ壺である。外面は横方向のミガキ仕上げ、胴部内面には細かい横ハケ目が残る。口縁内面から外面にかけて赤彩される。

６は最小径5.0 cmの長頸で、上方でラッパ状に開くものと思われる。外面は釉薬が薄く刷毛塗りされ、内面には降灰釉が付着する。７は小型平瓶形の瓶類で、肩は丸みを帯びる。８は径３cmの扁平擬宝珠の摘みである。７・８ともに外面に降灰釉がかかる。９は大形箱型の坏である。底部は回転ヘラ起こし後ヘラ削り整形される。

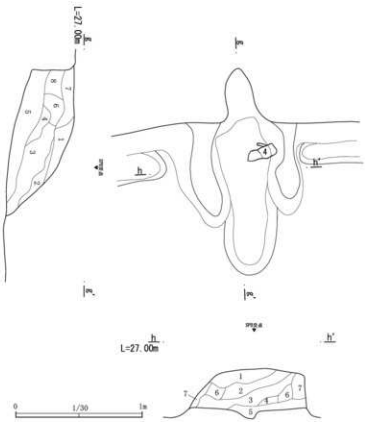
11は平坦な円柱状を呈した支脚で、底は20°の傾斜を以て（斜めに）立ち上がる。12も同様な形状を呈し、複数で使用されたものと思われる。13は窪み石を思わせる台石である。

所見：出土した須恵器の特徴を整理すると、６は東海産のフラスコ形長頸瓶、８は擬宝珠摘み付き蓋でかえしのある形状である。大型低平な坏については新治栗山窯に類似を求めることができ、総体的に古墳時代終末（７世紀第４四半期）に位置付けられよう。

【SI01-A8】
1 層　暗色土主体　ローム粒子 1%φ 1 mm　しまり粘性中
2 層　暗色土　ローム粒子 1%φ 1 mm　しまり粘性中
3 層　黄褐色土主体　黒色土が混じる　ローム粒子・ブロック 1%φ 1mm～5 mm　炭化物含む　しまり粘性中
4 層　暗色土　黄褐色土が混じる　ローム粒子・ブロック 10%φ 1mm～5mm　炭化物ブロック 1%φ 5 mm　しまり粘性中
5 層　黄褐色土主体　黒色土が混じる　ローム粒子・ブロック 3%φ 1mm～5mm　炭化物ブロック 1%φ 5 mm　しまり粘性中
6 層　暗褐色土　炭化物少量含む　ローム粒子・ブロック 10%φ 1mm～ 10 mm　しまり粘性中
7 層　黄褐色土　ローム粒子 5%φ 1mm～ 3 mm　焼土粒子・ブロック 1%φ 1～10 mm　炭化物ブロック 1%φ 1mm～3 mm　しまり小・粘性中
8 層　暗褐色土　炭化物ブロック 1%φ 10 mm　焼土粒子 1%φ 1 mm　しまり粘性中
9 層　暗褐色土　ローム粒子・ブロック 7%φ 1mm～ 10 mm　焼土粒子・ブロック 1%φ 1～10 mm　しまり小・粘性中


L=27.00m
L=27.00m
L=27.00m
L=27.00m
L=27.00m
L=27.00m
P1
P2
P3
P4
P5
貯蔵穴
調査区外
L=26.50m
L=26.50m
L=26.50m
L=26.50m
L=26.50m
L=26.50m
SI01P1
1層　10YR2/4 暗褐色土　ローム粒子5%φ1～2mm　しまり中・粘性小
2層　10YR2/3 暗褐色土　ローム粒子5%φ1～2mm　炭化物ブロック1%φ1～2mm　しまり中・粘性小
3層　10YR2/4 暗褐色土　ロームブロック5%φ2～5mm　しまり中・粘性中
4層　10YR2/4 暗褐色土　ローム粒子5%φ1～2mm　しまり中・粘性中
SI01P2
1層　10YR2/3 黒褐色土　炭化物ブロック5%φ2～5mm　しまり中・粘性小
2層　10YR2/4 暗褐色土　ロームブロック80%φ5～10mm　しまり中・粘性中
3層　10YR2/4 暗褐色土　ローム粒子5%φ1～2mm　しまり中・粘性小
SI01P3
1層　10YR2/4 暗褐色土　ローム粒子5%φ1～2mm　しまり中・粘性小
2層　10YR2/4 暗褐色土　ロームブロック10%φ5～10mm　しまり中・粘性小
3層　10YR2/3 黒褐色土　ロームブロック50%φ5～10mm　しまり中・粘性中
SI01P4
1層　10YR2/4 暗褐色土　ローム粒子5%φ1～2mm　しまり中・粘性小
2層　10YR2/4 暗褐色土　ロームブロック10%φ5～10mm　しまり中・粘性小
3層　10YR2/3 黒褐色土　ローム粒子30%φ1～2mm
0
1/60
2m

第9図 SI01



SI01 竈

1層　10YR4/2 灰黄褐色土　ローム粒子 30%φ1～2mm しまり小・粘性小

2層　5YR2/2 黒褐色土　焼土粒子 10%φ1～2mm　しまり中・粘性なし

3層　5YR2/2 黒褐色土　焼土粒子 20%φ1～2mm　炭化物ブロック 20%φ1～2mm　しまり中・粘性中

4層　5YR3/6 暗赤褐色土　焼土粒子 90%φ1～2mm　しまり強・粘性なし　天井崩落か

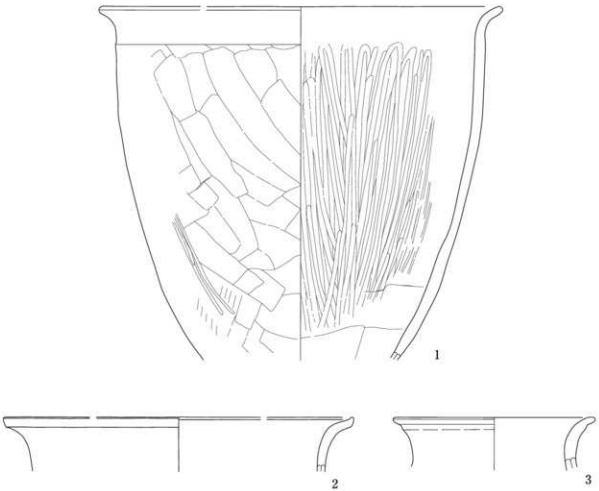
5層　5YR2/3 極暗褐色土　焼土粒子 40%φ1～2mm 砂 20%φ1～2mm　しまり強・粘性なし

6層　5YR2/2 黒褐色土　ローム粒子 5%φ1～2mm　焼土粒子 5%φ1～2mm　砂 20%φ1～2mm

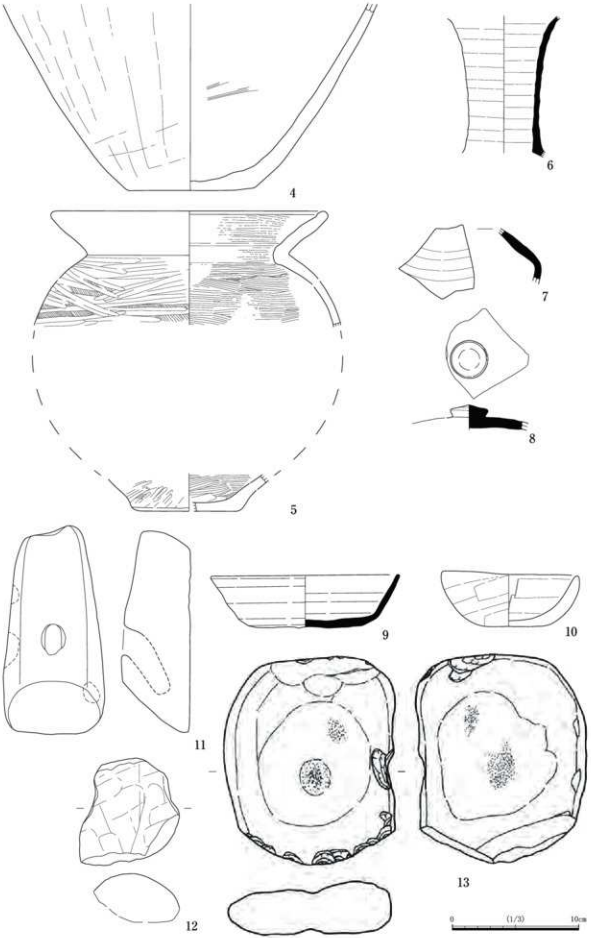
7層　5YR3/2 暗褐色土　焼土粒子 20%φ1～2mm　しまり中・粘性中　煙道

8層　5YR2/2 黒褐色土　砂 20%φ1～2mm　しまり強・粘性なし　全体的に砂混じり

第 10 図 SI01 竈



第 11 図 SI01 出土遺物 1



第12図 SI01出土遺物2

第 1 表 SI01 出土遺物観察表

番号	注記番号	種類	器種	残存（残存率）	計測値 口 高 底	計測値 重量	器形の特徴	整形の特徴	胎土	色調	焼成	備考
1	18トレ－1・22	土師器	甕	口縁部～体部 底部欠損（35%）	(32.0) (28.0) —	809.7	口縁は緩やかに外反し、胴部はやや中膨で、底立気味に内湾する。底部は平孔式となる。	口縁は内外ともに横ナデ。外面胴部は斜方向ヘラケズリ、内面はヘラナデの後縦方向の粗いミガキ。	赤色粒子多量／白色粒子少量	内外：橙色 7.5YR7/6 橙	良好	外面黒斑
2	15・3区下層	土師器	甕	口縁部片	(27.8) (4.3) —	51.6	口縁は外反して大きく開き、口唇端部でつまみ上げられる。	内外ともにナデ。	雲母／白色粒子多量	内外：7.5YR6/4 鈍橙	良好	常総型甕の特徴 甕の可能性有
3	13	土師器	甕	口縁部片	(16.0) (3.8) —	46.7	口縁は、やや「コ」の字に外反して開く。やや十膨気味となる。	内外ともにナデ。	白色微粒子多量／赤色微粒子微量	内外：5YR5/6 明赤褐	良好	煤付着
4	カマド1・カマド一括・P1一括・P4一括	土師器	甕	胴下半～底部（40%）	— (15.0) 10	1233.1	底部は広く、胴部はゆるやかに内湾して立つ。	外面胴部は、斜方向のヘラケズリ。内面は斜方向のナデ。	粗い白色粒子・透明粒子多量	内外：5YR5/6 明赤褐	やや良	酸化 ハゼ痕 常総型甕か
5	17・19・23・18トレ－1区中央・1区南面－上層・中層－下層・4区上層・カマド一括	土師器	壺	口縁片 底部片 胴部欠損	(21.3) — 8.0	407.4	口縁は「く」の字に折れて立つ。胴部は球形を呈し、底部は中央突出する。	口縁は内外ヨコナデ。外面胴部は横方向のミガキ。内面横位ハケナデ後ミガキ。	白色粒子／赤色粒子多量	内外：5YR4/4 鈍赤褐	やや良	内口縁・外全面赤彩 底部に木葉痕
6	11	須恵器	長頸瓶	頸部	— (11.5) —	211.8	頸部は円筒状を呈し、口辺でやや外反して開く。	内外ともにロクロ目が残り、内面は降灰釉がかかる。	緻密	内外：5Y7/1 灰白	優良	岩城灰釉ヵ 新西産
7	7	須恵器	瓶類	頸部片	—	22.9	頸部で屈曲する。	外面は自然釉がかかる。内面はロクロ目が残る。	緻密	内：2.5Y4/2 暗灰黄 外：5YR/1 灰	優良	東海系ヵ
8	6	須恵器	壺	天井摘み部	— (1.9) —	46.1	緩やかに内湾し、中央に径3cmの扁平宝珠の摘みが付きされる。	内面はロクロ目が残る。外面は降灰釉が被る。	緻密	内外：5Y7/1 灰白	良	矢示くれがみられる。新西産
9	1	須恵器	坏	口縁片～底部完周（70%）	14.8 4.1 8.2	151.3	底部は平底。底部は緩やかに内湾して立つ。下端部はヘラによって調整される。	内外ともにロクロ目が残る。底部外面は回転ヘラ起こしの後外縁部をヘラケズリしている。	雲母多量／白色粒子多量	内外：2.5YR/1 黄灰	優良	新治産
10	20	土製品	手捏ね	完形（100%）	10.7 5.4 —	223.1	底部は径4.8cmの平底を意識した丸底で、口縁は内湾気味に立つ。	内外面ともに、丁寧にナデ。	白色粒子／透明粒子／赤色粒子	内外：7.5YR7/6 橙	良好	厚手 一部煤付着
11	カマド1	土製品	支脚	完形（100%）	縦16.6 横8.0 厚さ5.4	628.3	円柱を2分割したような形状。下端は平坦で、柱部は20°の傾斜を以て立ち上がる。	全面ナデ。	雲母／白色粒子／砂粒	2.5YR5/4 鈍褐	不良	内側に径1.9cm、深さ5cmの孔が斜めに穿たれる。
12	21	土製品	支脚	両端を折損している。	縦7.9 横7.7	216.9	円柱を2分割したような形状。	全面ナデ。	白色粒子／透明粒子	内外 5YR5/4 鈍赤褐	二次焼成	酸化
13	12	石製品	台石（砂岩）	完形ヵ（100%）	縦16.5 横13.3 厚さ4.0	1735.5	扁平な自然礫を用いるもので、上下両面中央部に窪みを有す。端部は二回の打撃により折られている。	台石は砂岩、貝化石を含む。				

・SI02（第 13 図　図版 4 ～ 5）

位置：南調査区北西に位置する。重複関係：単独。

平面形：胴張隅丸長方形を呈す。　主軸方向：N-45°　-W　規模：主軸長 719 cm・短軸長 614 cmを測る。

壁形態：ほぼ垂直に 60 cmほど立ち上がり、壁溝はない。

床構造：壁下より中央に向かってわずかに窪み、硬化面はあまり明瞭ではなくP1・P2・P4 と炉の周辺にのみ認められるにすぎない。

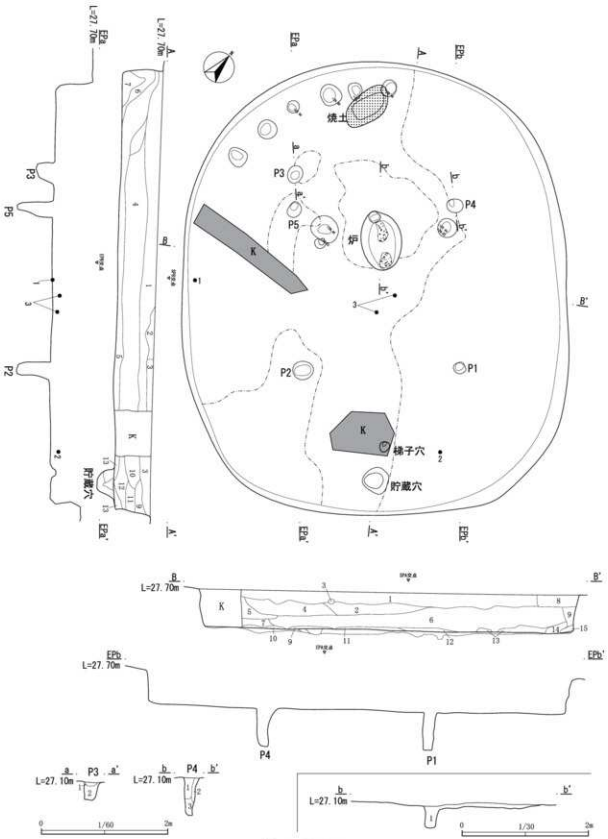
柱穴：主柱穴はほぼ正方形に配置される。各芯々間距離　P1-P2：255 cm・P2-P5：258 cm・P5-P4：254 cm・P4- P1：258 cm。P3 を除くP1 ～P5　は径　20 ～ 33 cm内外の平面円形を呈し、深さ 54 cm～ 60 cmを測る。P1・P2 からは炭化物が検出された。また、P5 に隣接するP3 は補助柱穴の可能性が高い。なお、床面下を精査したところ、炉に対面した南壁付近に P6 を検出、梯子穴の可能性が高い。

貯蔵穴：南東直下に位置する。42 cm× 42 cm・深さ 26.7 cmの平面円形である。

炉：P5 - P4　間やや内側に位置する。95 cm× 65 cmの平面楕円形を呈する。掘り込みはほとんどない地床炉で、火床は奥と手前に別れている。被熱の痕跡はさほど厚くない。

覆土：壁際からの流入や床面の風化による褐色土の堆積が薄くみられ、その後は部厚く自然堆積が続く。

遺物出土状況：遺物の多くは床面より浮いた状態で出土した。とくに３・４などは遺構中央部の下層黒色土中から検出された。

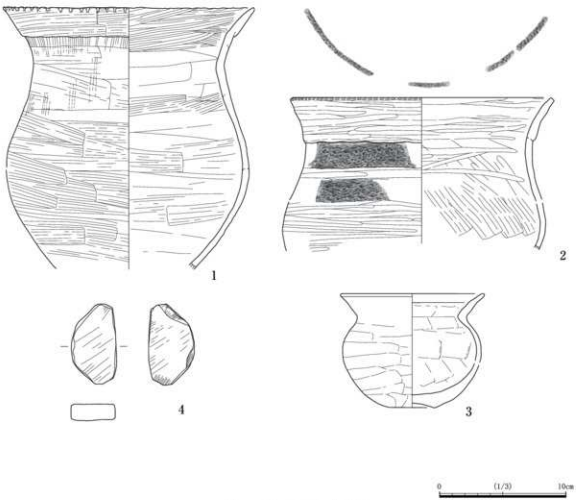


第 13 図 SI02

SI02A
1 層　10YR4/1 褐灰色土　ローム粒子 3%φ 1 ～ 3 ㎜　しまり小・粘性小
2 層　10YR3/2 黒褐色土　ローム粒子 1%φ 1 ㎜　しまり中・粘性小
3 層　10YR4/1 褐灰色土　ローム粒子 1%φ 1 ㎜　しまり中・粘性中
4 層　10YR4/1 褐灰色土　ローム粒子 3%φ 1 ～ 3 ㎜　しまり中・粘性小
5 層　10YR4/1 褐灰色土　ローム粒子・ブロック 5%φ 1 ～ 7 ㎜　しまり中・粘性小
6 層　10YR3/1 黒褐色土　ローム粒子 5%φ 1 ～ 5 ㎜　しまり強・粘性小
7 層　10YR4/1 褐灰色土　ローム粒子 3%φ 1 ～ 3 ㎜　しまり中・粘性小
8 層　10YR6/3 にぶい黄褐色土　ローム粒子・ブロック 20%φ 1 ～ 15 ㎜　しまり強・粘性強
9 層　10YR4/2 灰黄褐色土　ローム粒子 3%φ 1 ～ 3 ㎜　しまり中・粘性小
10 層　10YR5/3 にぶい黄褐色土　ローム粒子・ブロック 10%φ 1 ～ 10 ㎜　しまり強・粘性中
11 層　10YR5/2 灰黄褐色土　ローム粒子 7%φ 1 ～ 3 ㎜　しまり強・粘性中
12 層　10YR3/1 黒褐色土　ローム粒子・ブロック 5%φ 1 ～ 10 ㎜　焼土粒子・ブロック 1%φ 1 ～ 10 ㎜　しまり中・粘性中
13 層　10YR4/2 灰黄褐色土　ローム粒子 7%φ 1 ～ 10 ㎜　しまり中・粘性小
14 層　10YR4/2 灰黄褐色土　ローム粒子・ブロック 5%φ 1 ～ 10 ㎜　しまり中・粘性小
15 層　10YR4/1 褐灰色土　ローム粒子・ブロック 1%φ 1 ～ 10 ㎜　しまり中・粘性小
SI02 個方
1 層　10YR4/1 褐灰色土　ローム粒子・ブロック 40%φ 1 ～ 10 ㎜　しまり小・粘性中
2 層　10YR6/8 明黄褐色土　ローム粒子・ブロック 70%φ 1 ～ 80 ㎜　しまり強・粘性中
SI02P1
1 層　10YR4/2 灰黄褐色土　ローム粒子 5%φ 1 ～ 3 ㎜　しまり小・粘性小
2 層　10YR4/3 にぶい黄褐色土　ローム粒子・ブロック 15%φ 1 ～ 7 ㎜　しまり中・粘性小
3 層　10YR4/3 にぶい黄褐色土　ローム粒子 5%φ 1 ～ 7 ㎜　しまり小・粘性小
SI02P4
1 層　10YR4/2 灰黄褐色土　ローム粒子・ブロック 5%φ 1 ～ 5 ㎜　しまり中・粘性小
2 層　10YR4/3 にぶい黄褐色土　ローム粒子 10%φ 1 ～ 5 ㎜　しまり中・粘性中
炉
1 層　10YR3/1 黒褐色土　ローム粒子 1%φ 1 ㎜　焼土粒子 7%φ 1 ～ 15 ㎜　しまり中・粘性中

遺物各説：弥生土器２点（甕）・土師器１点（壺）・石製品１点を掲載した。１は口径 20 ㎝の甕である。幅３㎝の複合口縁帯を有し、頸部はなだらかに胴部に移行する。口唇部にヘラ刻みが一周し、全体に小口状工具によるヨコナデ仕上げされる。２も口径 20.5 ㎝の甕である。幅 3.3 ㎝の口縁帯を有し、口唇部には施文工具による押捺が一周する。頸部の上下に「S」字状結節文が各２条単位で横走する。３は口径 11.3 ㎝・高さ 9.0 ㎝の小型壺である。全体としてナデ仕上げであるが、口縁内部から外全面赤彩される。ともに外面に煤が付着する。４は平石を三角形に加工した、小型の砥石である。

所見：柱穴を観る限り抜かれた痕跡が明瞭で、覆土も自然に埋没した過程を示している。住居廃棄・上屋解体とともに放置されたものと思われる。出土土器の特徴から弥生時代終末期に位置づけられる。



第 14 図　SI02 出土遺物

第２表 SI02 出土遺物観察表

番号	注記番号	種類	器種	残存（残存率）	計測値		器形の特徴	整形の特徴	胎土	器色	焼成	備考
					口径 底	重量						
1	13・3 区ベルト一括	弥生土器	甕	底部欠損（70%）	20.0 (20.8) —	610.4	胴部は緩やかに外反し、口縁部は外面に段を有す。口唇部に刻み目施される。	内外面小口状工具によるナデ	白色粒子／骨針／透明粒子	内外：10YR4/2灰黄褐	良好	外全面に煤付着
2	2・1 区下層・4 区ベルト一括	弥生土器	甕	口縁～胴部（35%）	(20.8) (12.6) —	294.2	胴部は緩やかに外反し、口縁部は外面に段を有す。口唇部に施文其押捺が施される。	胴部に「S」字状結節文が上下に４単位・２段施される。内外面ミガキ	白色粒子／骨針／黒色粒子／赤色粒子	内：10YR4/3 鈍黄褐 外：7.5YR4/3 褐	良好	外面一部に煤付着
3	9・10・2 区上層・SI02 一括	土師器	小型壺 口縁	胴部欠損（50%）	11.7 (9.0) 3.6	194.9	底部は小さく上げ底。胴部は玉葱形を呈し、胴部「く」の字に屈曲し開く。	外面ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ	白色粒子／透明粒子／赤色粒子	内外：5YR5/4 鈍赤褐	良好	内面口縁～外面赤彩
4	3 区中層	石製品	砥石	完形（100%）	縦 6.4 横 3.5 厚さ 1.4	50.5	平石を三角形に加工する。		砂岩			

・SI03（第 15 ～ 16 図　図版６～７）

位置：北調査区北西隅に位置し、SI04 と近接する。重複関係：単独

平面形：方形を呈する。　主軸方向：N-57°　-W　規模：主軸長 639 ㎝　横軸長（推定）623 ㎝を測る。

壁形態：ほぼ垂直に 55 ㎝ほど立ち上がり、南西壁下を除き幅 20 ㎝の浅い壁溝が廻る。

床構造：一部壁際を除き全体に硬化面が残る。

柱穴：南半部に２本、P1-P2 芯々間で 320 ㎝。径 50 ㎝、深さ各 58・42 ㎝の柱穴である。

貯蔵穴：南東壁直下に位置する。55 ㎝× 60 ㎝・深さ 20 ㎝の平面円形、断面皿状を呈する。また、南西壁下にも 90 ㎝× 65 ㎝の平面楕円形の浅い窪みがある。

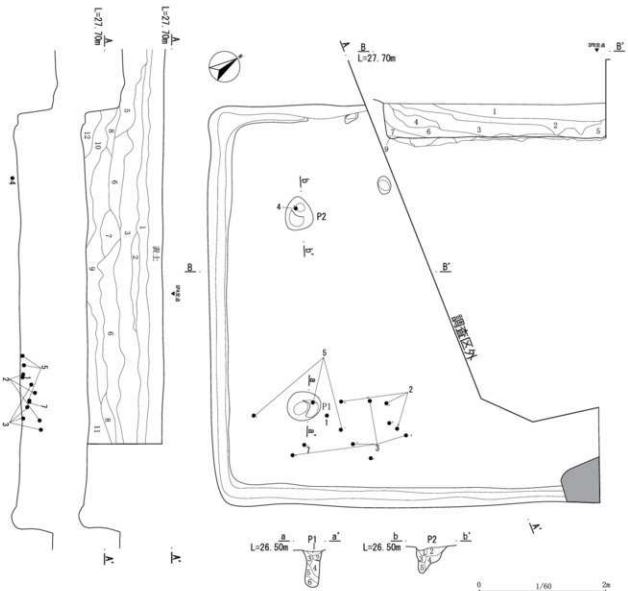
炉：不明、おそらくは西側調査区域外に現存するものと思われる。

覆土：壁際から徐々に褐色土の埋め戻しが行なわれ、最後に中央部分の窪みに黒色土の自然堆積がみられる。

遺物出土状況：遺構南隅側からの流れ込み土中に多くの遺物が含まれるようで、いずれも浮いた状態を示している。中でも４は床面に最も近い。

遺物各説：土師器７点（甕６・高坏１）を掲載した。１～４は口径 15 ㎝～ 17.7 ㎝の長胴甕である。口縁は緩やかに外反し、胴部は中央で最大径（19 ㎝～ 23.5 ㎝）となる。外面タテヘラ削り、内面ヘラナデ仕上げで、６を含めいずれも器肉は分厚い。煤付着や被熱剥離など使用痕跡が明瞭である。７は高坏円柱状脚部で、外面タテミガキ・内面には巻上げ痕が明瞭である。

所見：一辺６ｍ級の中型竪穴建物で、整然とした構造である。長胴化しはじめた甕の特徴から古墳時代中期でも SI04 に比べて新しい要素を含む時期と考える。



第 15 図 SI03

SI03 覆土

表土　5YR4/2 灰褐色土　しまり強・粘性微

1 層　10YR4/3 にぶい黄褐色土　ローム粒子 1%φ 1 mm　焼土粒子 1%φ 1 mm　しまり中・粘性小

2 層　10YR2/1 黒褐色土　ローム粒子 1%φ 1 mm　しまり中・粘性小

3 層　10YR4/2 灰黄褐色土　ローム粒子 3%φ 1 ～ 3 mm　しまり中・粘性中

4 層　10YR4/2 灰黄褐色土　ローム粒子 1%φ 1 mm　焼土粒子 30%φ 1 ～ 3 mm　しまり中・粘性中

5 層　10YR4/2 灰黄褐色土　ローム粒子 1%φ 1 ～ 3 mm　しまり中・粘性中

6 層　10YR4/2 灰黄褐色土　ローム粒子 1%φ 1 ～ 3 mm　焼土粒子 1%φ 1 mm　しまり強・粘性小

7 層　10YR4/2 灰黄褐色土　ローム粒子 3%φ 1 ～ 5 mm　しまり中・粘性中

8 層　10YR4/2 灰黄褐色土　ローム粒子 7%φ 1 ～ 5 mm　しまり中・粘性小

9 層　10YR2/1 黒褐色土　ローム粒子 5%φ 1 ～ 5 mm　しまり中・粘性中

10 層　10YR4/3 にぶい黄褐色土　ローム粒子 3%φ 1 ～ 3 mm　しまり中・粘性小

11 層　10YR2/1 黒褐色土　ローム粒子 5%φ 1 ～ 7 mm　しまり中・粘性小

12 層　10YR4/2 灰黄褐色土　ローム粒子・ブロック 10%φ 1 ～ 20 mm　しまり中・粘性微

13 層　10YR6/8 明黄褐色土　ローム粒子・ブロック 70%φ 1 ～ 30 mm　しまり強・粘性強

SI03P1

1 層　10YR2/1 黒褐色土　ローム粒子 3%φ 1 ～ 3 mm　しまり中・粘性小

2 層　10YR4/2 灰黄褐色土　ローム粒子・ブロック 20%φ 1 ～ 10 mm　焼土ブロック 3%φ 5 mm　しまり小・粘性中

3 層　10YR4/3 にぶい黄褐色土　ローム粒子 10%φ 1 ～ 5 mm　しまり小・粘性中

4 層　10YR4/3 にぶい黄褐色土　ローム粒子 5%φ 1 ～ 5 mm　しまり小・粘性中

5 層　10YR4/3 にぶい黄褐色土　ローム粒子 3%φ 1 ～ 10 mm　しまり小・粘性中

6 層　10YR4/3 にぶい黄褐色土　ローム粒子 1%φ 1 mm　しまり中・粘性中

SI03P2

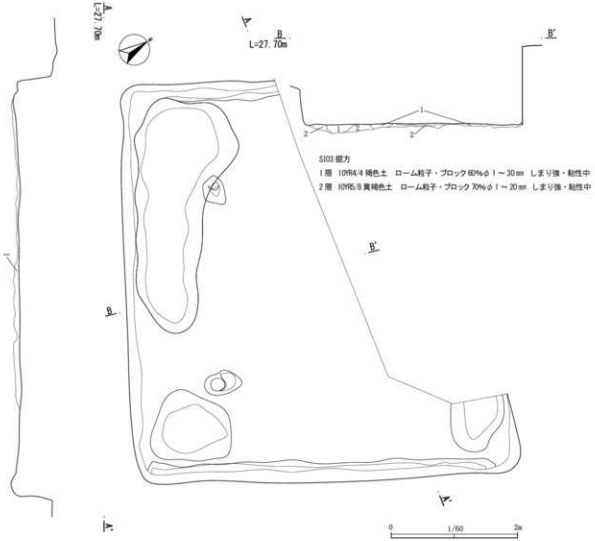
1 層　10YR4/3 にぶい黄褐色土　ローム粒子・ブロック 7%φ 1 ～ 5 mm　しまり小・粘性中

2 層　10YR4/1 褐灰色土　ローム粒子・ブロック 5%φ 1 ～ 5 mm　しまり小・粘性中

3 層　10YR4/2 灰黄褐色土　ローム粒子 7%φ 1 ～ 3 mm　しまり小・粘性中

4 層　10YR4/3 にぶい黄褐色土　ローム粒子 7%φ 1 ～ 3 mm　しまり小・粘性小

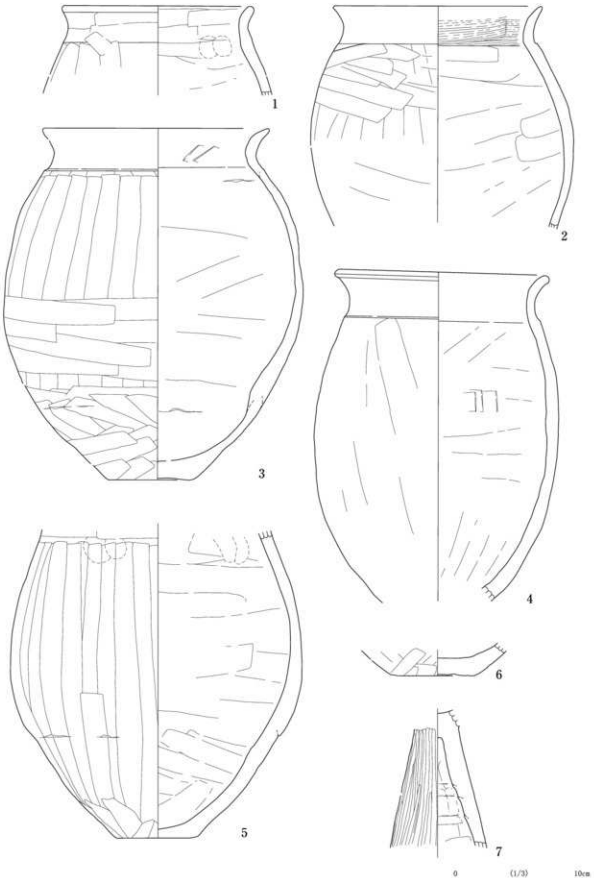
5 層　10YR4/3 にぶい黄褐色土　ローム粒子 7%φ 1 mm　しまり小・粘性中



第 16 図 SI03 掘方

第 3 表 SI03 出土遺物観察表

番号	注記番号	種類	器種	残存（残存率）	計測値 口高 底	計測値 重量	器形の特徴	整形の特徴	胎土	器色	焼成	備考
1	1・2	土師器	甕	口縁部片	(14.9) (7.0) —	12.5	口縁部は肥厚し、頸部はゆるやかに外反する。	外面胴部縦位ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ	白色粒子／透明粒子／黒色粒子	内：2.5YR4/4 褐赤橙 外：7.5YR6/4 褐橙	良好	酸化 外面剥落
2	11・6・13	土師器	甕	胴下半欠損（50%）	16.5（17.0） —	945.9	口縁は外反し開く。胴は長胴を呈す	外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ、口縁部ヨコナデ	白色粒子／小礫／赤色粒子	内外：10YR6/3 褐黄橙	良好	酸化 黑斑 外面剥落
3	8・10・14・3・25・SI01 トレ・2区 上層一括	土師器	甕	口縁部完形（95%）	17.7 27.9 6.6 胴径 23.5	1893.5	口縁は外反し開く。胴は長胴を呈す	外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ、口縁部ヨコナデ	砂礫多量／透明粒子／白色粒子	内外：5YR3/1 黑褐	良好	酸化 黑斑
4	15	土師器	甕	底部欠損（95%）	16.3 (26.1)	2360.0	口縁は外反し開く。胴は長胴を呈す	外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ、口縁部ヨコナデ	白色粒子多量／砂礫／透明粒子	内外：7.5YR5/3 にぶい褐	良好	煤付着 酸化
5	2・5・7	土師器	甕	底部～胴上部（35%）	— (24.3) 6.5 胴径 (23.1)	752.8	底部は平底で胴部は長胴	外面縦位ヘラケズリ、内面ヘラナデ	白色粒子／透明粒子／骨針	内外：5YR3/1 黑褐	良好	黒縁甕 黑斑 煤付着
6	4区一括	土師器	甕	底部片	— (2.6) 6.5	152.2	平底	外面ヘラナデ 内面剥落	白色粒子／砂礫多量／透明粒子	内：5YR5/3 褐赤褐 外：5YR4/4 褐赤褐	良好	酸化 外面剥落
7	4	土師器	高坏	脚柱部（35%）	— (11.0) —	218.4	脚部の器肉は厚く、直線的にやや開く。	外面縦位ミガキ、内面粘土積み上げ痕	白色粒子／赤色粒子やや多／透明粒子	内外：2.5YR4/4 褐赤褐	良好	酸化



第 17 図 SI03 出土遺物

・**SI04**（第18図　図版8）

位置：北調査区東端に位置する。　重複関係：単独

平面形:方形を呈す。　主軸方向:N-41°　-W(西辺を軸とした線)　規模:主軸(確認長)750 cm超　横軸(確認長) 200 cm超を測る。

壁形態：ほぼ垂直に60 cmほど立ち上がり、壁下全面に幅20 cm・深さ7 cmほどの壁溝が廻るようである。

床構造：硬化面は明瞭ではない。

柱穴：主柱穴と考えられるものはP1のみ。径　20 cm・深さ　29　cmほどである。また、南西壁溝内にP2を確認、径21 cm・深さ34 cmほどである。

貯蔵穴：南西隅壁直下、102.6 cm× 81.6 cm・深さ34.2 cmの平面不正楕円形、断面皿状を呈する。

炉：不明、北東部調査区域外に現存するものと思われる。

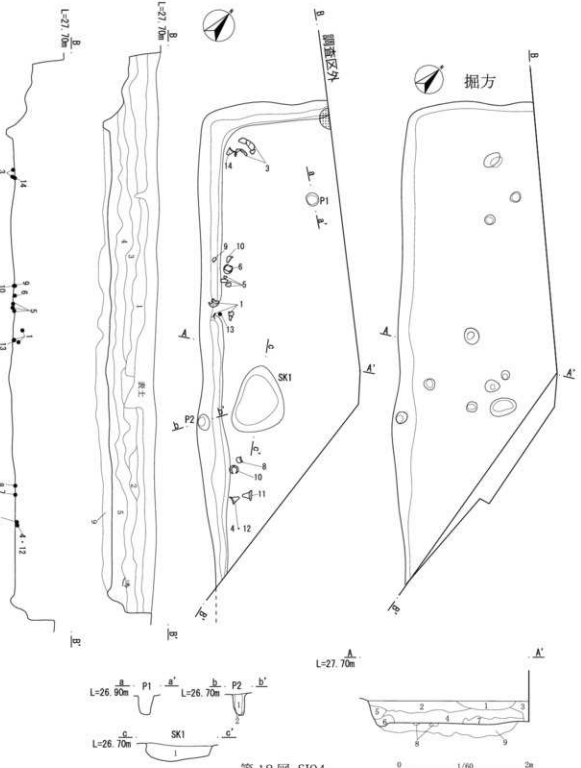
覆土：　床面の風化を示す褐色土の薄層が全体に見られ、その後、壁際から褐色・明褐色土の堆積が、中央部には灰黄褐色土の部厚い堆積が続く。

遺物出土状況：西壁下に連なって、床面近くに遺物が検出された。ただし、置かれたというよりも散乱している状態を示している。

遺物各説：土師器14点（甕1・壺8・高坏5）を掲載した。1は中型の甕で、口径17.2 cmに対し高さ16 cmと短胴である。口縁部は緩やかな「く」字状に開き、底部はわずか6 cmと不安定である。2は口径17.5 cm・胴部最大径22 cm超の大型壺である。口縁部は直線的に「く」字状に開き、幅3 cmの薄い粘土貼り付け口縁帯が見られる。3は口径14 cm・胴部最大径25.4 cm、口縁部は直立に近く幅2 cmの折り返し口縁帯が廻る。ともに外面はヘラ削り後まばらに斜ミガキを施す。

4～8は中形の壺、9はいわゆる小型壺である。4は口径11.9 cm「く」字状に屈曲する口縁、5は最大径15 cm超の扁平な胴部を有する壺である。ともに比較的丁寧な作りで、口縁内部から外全面赤彩される。6・7は口縁を欠くが、玉葱型の胴部と小さな底がつく。ともに煤付着する。8は短い「く」字口縁と扁平丸底の胴部である。いずれも部厚く粗い作りである。9は口縁が「く」字状に立ち上がり、玉葱型の胴部と接合する。底部は小さく不安定である。ヨコナデ仕上げの後、口縁部内面から外全面赤彩される。10～14は坏部を欠く大型高坏の一群である。脚部から裾部までの高さ13 cm～15 cm・裾の径14 cm～17 cmを計り、脚部はやや上部ですぼまる円柱状を呈し、裾部は屈曲して大きく開く。脚の内面には巻上げ痕が明瞭にみられる。

所見：一辺8 mを超える大型の竪穴建物となろう。遺物の出土状況から遺構内に一括して廃棄されたものと思われる。出土土器の特徴から古墳時代中期前半に位置づけられる。



第18図 SI04

SI04 覆土

1 層　10YR2/1 黒褐色土　ローム粒子 3%φ 1 mm　しまり中・粘性小

2 層　10YR2/1 黒褐色土　ローム粒子 3%φ 1 ～ 3 mm　しまり中・粘性小

3 層　10YR2/1 黒褐色土　ローム粒子 1%φ 1 mm　しまり中・粘性小

4 層　10YR4/3 にぶい黄褐色土　ローム粒子 7%φ 1 ～ 3 mm　炭化物ブロック 1%φ 10 mm　しまり小・粘性小

5 層　10YR4/4 褐色土　ローム粒子 5%φ 1 ～ 3 mm　しまり中・粘性強

6 層　10YR5/6 黄褐色土　ローム粒子 5%φ 1 ～ 3 mm　しまり小・粘性小

7 層　10YR5/8 黄褐色土　ローム粒子 5%φ 1 ～ 3 mm　しまり中・粘性中

SI04 掘方

8 層　10YR3/2 黒褐色土　ローム粒子・ブロック 3%φ 1 ～ 10 mm　しまり中・粘性中

9 層　10YR4/6 褐色土　ローム粒子・ブロック 70%φ 1 ～ 70 mm　しまり強・粘性中

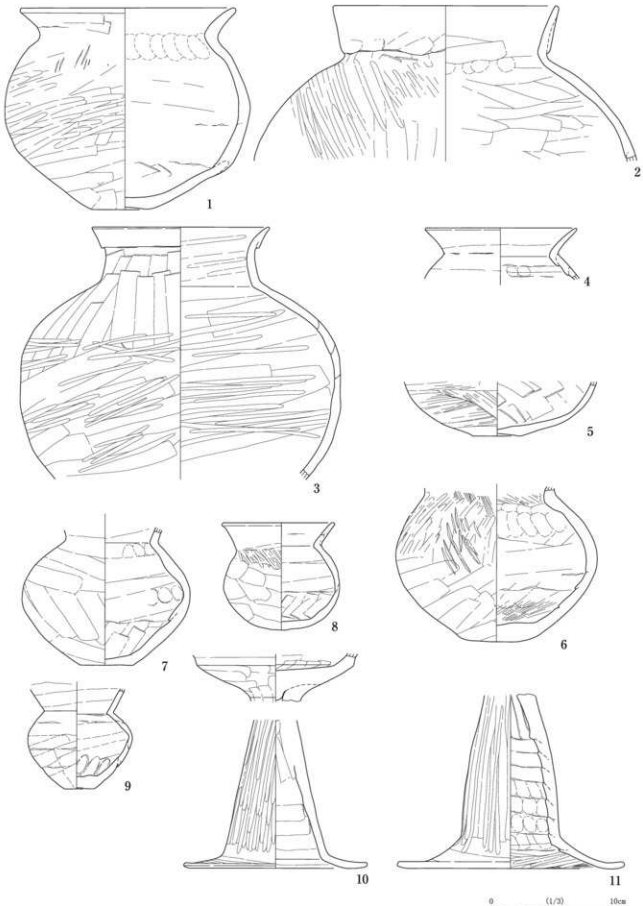
P01

1 層　10YR3/4 暗褐色土　ローム粒子・ブロック 3%φ 1 ～ 3 mm　しまり小・粘性中

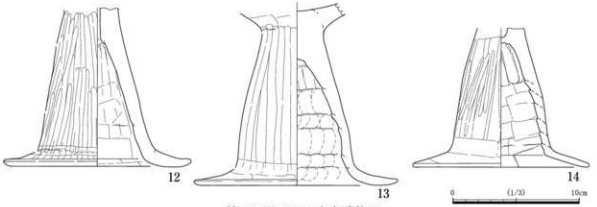
2 層　10YR4/6 褐色土　ローム粒子 1%φ 1 mm　しまり中・粘性中

SK01

1 層　10YR4/2 灰黄褐色土　ローム粒子・ブロック 10%φ 1 ～ 15 mm　しまり小・粘性小



第 19 図 SI04 出土遺物 1



第 20 図 SI04 出土遺物 2

第 4 表 SI04 出土遺物観察表

番号	注記番号	種類	器種	残存（残存率）	計測値 口	計測値 高	計測値 底	重量	器形の特徴	整形の特徴	胎土	器色	焼成	備考
1	11・12・14	土師器	甕	ほぼ完形（95%）		17.2 16.0 6.0		961.9	扁平な胴部に，「く」字に外反する口縁部。底部はかさく不安定。全体に粗い作り。40 mmの輪積み痕残る。	全体に不透明なナデ消し，胴部下半斜方向のヘラ削り	白色粒子／透明粒子／小礫	内外：7.5YR6/4 鈍橙	良好	外全面黒斑
2	SI04 壁 1	土師器	鉢	口縁～胴部（25%）		(17.5) (14.0) —		219.9	粘土貼り付けの口縁部は「く」字に屈曲し，球形の胴部に接続する。内面に 25 mm～30 mmの輪積み痕明瞭。	口縁部はヨコナデ，胴部は斜ミガキ，胴下半は丁寧なタテヘラ削りのまま。	白色粒子／透明粒子／骨針／砂礫／赤色粒子	内：7.5YR4/2 灰褐 外：2.5YR5/4 鈍赤褐	良好	
3	1・3	土師器	鉢	口縁～胴中位（32%）		13.9 (20.0) — 胴径 (25.4)		750.8	折り返し口縁部は「く」字に屈曲し，扁平な胴部へと接続する。内面に 45 mm～50 mmの輪積み痕残る。	外面ヘラケズリ後まばらなミガキ。口縁部ヨコナデ。内面ヘラナデ	白色粒子／黒色粒子	内：7.5YR7/6 橙 外：5YR6/8 橙	良好	外一部黒斑
4	19	土師器	鉢	口縁部（33%）		11.9 (4.0)		123.3	外反する口縁部に，球形の胴部を外側から接続する。	内外とも丁寧なヨコナデ	白色粒子／透明粒子／砂粒	内外：2.5YR5/6 明赤褐	良好	内口縁・外全面赤彩
5	9・8・10・7・SI04 一括	土師器	鉢	底部～胴下半（40%）		— (4.3) 5.0		205.2	上げ底部は小さく，胴部は扁平な球形を呈す。	外胴部下半は粗い斜ヘラ削り。内ヘラナデ	白色粒子／透明粒子／小礫／骨針	内外：5YR5/4 鈍赤褐	良好	胴部上半は赤彩
6	7・4 区上層一括	土師器	鉢	口縁部欠損（85%）		— (11.8) 6.0		639.1	胴部は屏の張るやや扁平な球形を呈す。底部は不安定である。	内面胴部下半部はやや粗いヨコヘラ削り。	白色粒子／透明粒子	内外：5YR4/1 褐灰	やや良	煤付着外面に焼成痕残
7	16	土師器	鉢	口縁部欠損（90%）		— (10.9) 3.9 胴径 13.4		535.2	胴部は玉ねぎ形を呈し，上げ底気味の底部は突出する。口縁・胴上半・下半部を接合している。	外面胴部下半部はやや粗いヨコヘラ削り。	白色粒子／透明粒子／黒色粒子／雲母／粗砂石	内外：10R5/6 赤	良好	外面煤付着，内口縁・外全面赤彩ヵ
8	15	土師器	小型鉢	口縁一部欠損（90%）		9.1 8.5 — 胴径 8.9		232.7	口縁部は「く」字に屈曲し，やや屏の張る球形の胴部に丸底となる。	外面胴部下半部はやや粗いヘラ削りにより細かく面取りされる。	黒色粒子／白色粒子／透明粒子／砂粒	内：2.5YR3/1 黒褐 外：7.5YR6/4 鈍橙	良好	黒斑
9	5	土師器	小型鉢	口縁部欠損（90%）		— (7.9) 1.5 胴径 8.3		176.3	胴部は算盤玉状を呈し，胴部で屈曲し口縁は短く開く。上げ底気味。	外面下半ヘラケズリ，上半ナデ 内面ナデ	白色粒子／透明粒子	内外：10R5/6 赤	良好	黒斑 内面口縁～外全面赤彩
8	15	土師器	小型鉢	口縁一部欠損（90%）		9.1 8.5 — 胴径 8.9		232.7	口縁部は「く」字に屈曲し，やや屏の張る球形の胴部に丸底となる。	外面胴部下半部はやや粗いヘラ削りにより細かく面取りされる。	黒色粒子／白色粒子／透明粒子／砂粒	内：2.5YR3/1 黒褐 外：7.5YR6/4 鈍橙	良好	黒斑
10	8 トレ住・6	土師器	高坏	坏部上半欠損・脚・脚 1/2（85%）		(15.4) (14.5) —		445.7	坏部下端に明瞭な稜を持つ。脚部は円柱状を呈し，脚部は屈曲して開く。坏下部に脚を有し，脚内部に巻上げ痕残る。	脚と坏接合部は下から上にヘラナデつけ，脚外面はタテナデ，内面はヨコ・ヨコ・ヨコ削り。	白色粒子／赤色粒子多量／透明粒子	内：5YR5/6 明赤褐	良好	
11	17	土師器	高坏	坏部欠損（70%）		— (4.3) —		530.5	脚部は円柱状を呈し，根部は屈曲して開く。脚内部に巻上げ痕明瞭。坏接合は不明。	脚外面はタテナデ，内面は指頭圧のまま。	白色粒子／赤色粒子／透明粒子	内：7.5YR6/3 鈍橙 外：10R5/6 赤	良好	外面一部黒斑
12	19	土師器	高坏	坏部欠損（70%）		— (13.7) (9.0)		531.6	脚部は円柱状を呈し，根部は屈曲して開く。脚内部に巻上げ痕明瞭。坏接合は不明。	脚外面はタテナデ，内面は指頭圧のまま。	白色粒子／赤色粒子／透明粒子	内：7.5YR6/3 鈍橙 外：10R5/6 赤	良好	
13	SI04 底・13	土師器	高坏	坏部欠損（45%）		(12.6) (14.8)		342.9	脚部は円柱状を呈し，根部は屈曲して開く。脚内部の巻上げ痕不明瞭。	脚外面はタテナデ，内面は指頭ナデのまま。	白色粒子／透明粒子／赤色粒子／小礫	内：5YR5/4 鈍赤褐 外：2.5YR5/6 明赤褐	良好	

番号	注記番号	種類	器種	残存（残存率）	計測値 口	計測値 高	計測値 底	計測値 重量	器形の特徴	整形の特徴	胎土	色調	焼成	備考
14	4・一括	土師器	鳥杯	坏部欠損（35%）	—		(11.0) (9.0)	354.4	脚部は円柱状を呈し、脚部は屈曲して開く。脚内部の巻上げ痕不明瞭。	脚外面はタテナデ、内面は指頭ナデ後下部へラ削り。	白色粒子／赤色粒子／明粒子／赤色粒子多量	内 外：2.5YR4/4 褐赤褐	良好	

・**SI05**（第21図　図版9）

位置：南調査区西端に位置し、主軸の近いSI02と近接する。重複関係：単独

平面形：隅丸方形を呈するものと思われる。主軸方向：N-39°-W　規模：東辺で480 cm超、北辺で280 cm超を測る。

壁形態：やや緩やかに25 cmほど立ち上がる。

床構造：とくに硬化した部分は認められない。北壁に沿って、床に接するように焼土の堆積が連続して認められる。

柱穴：北東隅のP1のみ検出、径45 cm・深さ32 cmの平面円形、断面U字形を呈する。

貯蔵穴：不明

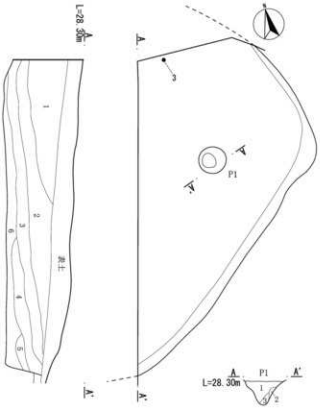
炉：不明

覆土：大きく黒色土・暗褐色土・黒色土の順に自然堆積している。

遺物出土状況：覆土中に土器小片が混入するに過ぎない。

遺物各説：掲載したのは甕壺破片に過ぎないが、口縁帯を有するもの、頸部にS字状結節文を廻らすもの、胴部全体に細縄文を施すものなどがある。また、実測できなかったが、大型の（細頸）壺の同一破片（160g）が見られる。

所見：土屋根材が焼化して壁下に落下している状況から、廃棄・焼却されたものと考えられる。出土土器の特徴から弥生時代後期に位置づけられる。



第21図 SI05・同出土遺物

SI05P01
1層　10YR2/3 黒褐色土　ローム粒子・ブロック 10%φ1～10 mm　しまり小・粘性中
2層　10YR4/6 褐色土　ローム粒子 5%φ1～3 mm　しまり強・粘性小
3層　10YR3/4 暗褐色土　ローム粒子・ブロック 10%φ1～7 mm　しまり小・粘性中
SI05A
1層　10YR3/2 黒褐色土　ローム粒子 1%φ1 mm　しまり強・粘性小
2層　10YR3/2 黒褐色土　ローム粒子 1%φ1～3 mm　しまり強・粘性小
3層　10YR4/3 にぶい黄褐色土　ローム粒子・ブロック 50%φ1～10 mm　しまり中・粘性小
4層　10YR4/3 にぶい黄褐色土　ローム粒子・ブロック 3%φ1～5 mm　しまり中・粘性小
5層　10YR4/2 灰黄褐色土　ローム粒子 1%φ1 mm　しまり強・粘性小
6層　10YR4/3 にぶい黄褐色土　ローム粒子・ブロック 5%φ1～7 mm　しまり強・粘性微
7層　10YR6/8 明黄褐色土　ローム粒子・ブロック 70%φ1～60 mm　しまり強・粘性小

第5表 SI05出土遺物観察表

番号	注記番号	種類	器種	残存（残存率）	計測値 口	計測値 高	計測値 底	計測値 重量	器形の特徴	整形の特徴	胎土	色調	焼成	備考
1	SI05 一括	弥生土器	甕壺	頸部片	—	—		10.1	外面に輪積痕を残し内面はナデ消される	縦、横回転	白色粒子／赤色粒子／砂粒	内外：10YR4/2 灰黄褐	良好	
2	SI05 一括	弥生土器	壺	頸部片	—			11.5	緩やかな各反	S字状結節文2条横走	白色粒子／雲母／黒色粒子	内外：5YR5/6 明赤褐	良好	
3	3	弥生土器	壺	胴部片	—			8.6	寸詰まり気味の胴部	地に LR 斜め回転	白色粒子／赤色粒子／砂粒	内外：10YR4/2 灰黄褐	良好	

第２節　土坑

・SK01（第 22 図　図版 9）

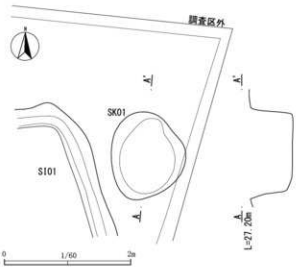
位置：南調査区東端に位置し、近接してSI01がある。
重複関係：単独

平面形：ほぼ楕円形を呈す。　主軸方向：（長軸）N－１２°－E　規模：長軸140㎝　短軸120㎝を測る。

壁形態：箱型に 74 ㎝ほど立ち上がる。　底構造：ほぼ平坦で、凹凸はない。

覆土：下層は褐色土と暗褐色土が互層を成している。人為的な堆積状況と考えられる。上層の窪みには腐植土系の黒土が自然堆積する。

所見：重複する遺構もなく、出土遺物がないため、時期・性格ともに不明である。覆土の観察から古墳時代前後の年代観が想定される。

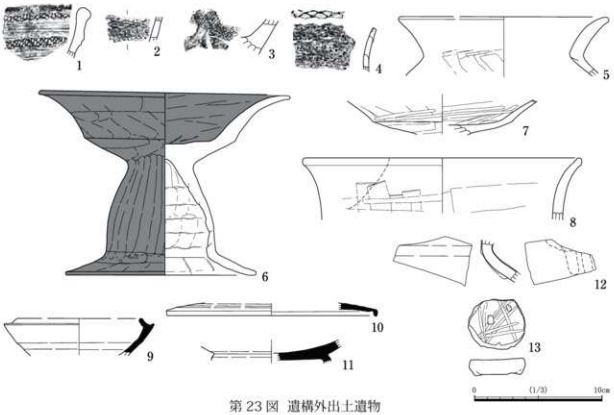


第 22 図 SK01

第３節　遺構外出土遺物（第 23 図　図版 14）

本節では竪穴建物覆土中から出土し、他時期の混入と判断される遺物、確認調査時の出土遺物について記す。掲載遺物は実測に堪えるサイズで、その特徴から形式が判断できるものを抽出し、詳細は観察表へと記載する。

遺物各説：1 は縄文時代後期安行式の深鉢口縁部片である。口唇部は肥厚し、2 段の隆帯上には RL 縄文が施文され間に沈線が横位に描かれる。2 ～ 4 は弥生土器である。2 は器肉が薄く、地紋は RL+R の付加条第 1 種が横回転施文され、上端は末端ループ文が横走する。3 は突出した底部片であり、外面は RL



第 23 図 遺構外出土遺物

の縦回転施文。4 は輪積み甕である。口唇は押圧によりひだ状を呈し、地紋はハケが横位に施される。いずれも弥生時代後期に位置付けられる。5 ～ 7 は古墳時代中期に比定される土師器である。5 の甕は器肉が厚く頸部で「く」の字に屈曲する。外面胴部にハケ後に斜位のヘラケズリが施され、器面には僅かに煤の付着が認められる。6・7 は共に高坏である。坏部は段を有し、脚部は所謂エンタシス状を呈する。器面には赤彩が施される。8 は甑である。頸部は緩やかに外反し肩の張りは無く長胴を呈す。

9 ～ 11 は須恵器である。9 は口縁部破片。産地不明。立ち上がりが低いことから大阪府・陶邑窯編年 TK209 ～ 217 窯式併行期に比定できよう。10 は蓋の口縁部破片。産地不明。外面の一部に自然釉が付着する。11 は高台付坏の底部破片。産地不明。ロクロ成形。底部外面は回転糸切り後、周縁回転ヘラケズリし高台を付すことから 8 世紀後半頃と考えられる。12 は中世陶器。常滑窯産の壺。頸部破片。外面および内面の一部に自然釉（濃緑灰色）が付着する。13 は円盤状土製品。ロクロ土師器高台付皿の体部・高台部を打ち欠いている。おそらく土製紡錘車に転用しかけた未成品であろう。

第 6 表 遺構外出土遺物観察表

番号	注記番号	種類	器種	残存（残存率）	計測値		器形の特徴	整形の特徴	胎土	器色	焼成	備考
					口 高 底	重量						
1	調査区西	縄文土器	深鉢	口縁部片	—	23.8	口唇肥厚し、内風して立つ	口縁部に広く浅い回線が巡り、回線内ナデされた後に2条の沈線が横走。口唇直下とロ縁部回線間に太い結束LR が横回転施文される。口唇及び内面は磨かれる。	白色粒子／小礫／赤色粒子	内 外：2.5YR4/1 赤灰	良好	縄文後期
2	18 トレ	弥生土器	壺	頸部片	—	6.1	緩やかな外反。	頸部に S 字状結節文 2 単位横走。胴部に末端ループ文	白色粒子／赤色粒子／砂粒	内 外：10YR4/2 灰黄褐	良好	
3	18 トレ	弥生土器	甕	底部片	—	21.9	突出気味の分厚い底部。	地に縦縄文	白色粒子／雲母／黒色粒子	内 外 面：5YR5/6 明赤褐	良好	
4	18	土師器	甕	口縁部片	—	12.7	緩やかに外反して開く。口唇部は指による交互の刻突が施され、ヒダ状になる。	頸部に横方向のハケ目が残り、輪積み痕がのこる。	透明粒子／雲母少量	内：7.5YR4/2 灰褐 外：7.5YR4/1 褐灰	良好	
5	13 トレ住	土師器	甕	口縁部片	(16.6) (4.4) —	129.0	頸部は屈曲し口縁は外反し開く。	外面ロ縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ	白色粒子／赤色粒子／黒色粒子	内 外：5YR5/6 明赤褐	良好	
6	1 区上層・1 区下層・ベルト一括・7・6・8	土師器	高坏	口縁一部欠損（90%）	19.4 14.4 14.9	851.8	坏部下端に明瞭な陵を有し、外反して大きく開く。脚部はエンタシス状に膨らみ、裾部は屈折して直線的に開く。脚内部には巻上げ痕明瞭。	外面ヘラケズリ（ミガキか）、内面ミガキ	白色粒子／透明粒子／砂礫	内：10YR5/3 鈍黄褐 外：10YR7/4 鈍黄橙	良好	坏内面・外全面赤彩
7	8 トレ No.1	土師器	高坏	坏部下半	— (4.3) —	233.5	坏部下端に明瞭な陵を有し、外反して大きく開く。	外面ヘラナデ a	白色粒子、赤色粒子、雲母	内 外：5YR3/4 明赤褐	良好	坏 摂 熱 内 面 剥 落、外面赤彩 a
8	4 区下層・4 区上層・2 区上層	土師器	甕	口縁部	(20.2) (4.3) —	57.8	口唇部が内側にわずかに摘み上げられる。	口縁ヨコナデ、胴部はタテハケナデ	砂粒／白色粒子／透明粒子／雲母少量	内：7.5YR6/4 橙	やや良	内 外 黒 斑 橙 a
9	18 トレ	須恵器	坏	口縁部片	(11.8) (2.9) —	13.3	蓋受け部の返り内傾する。坏部は丸底。	ロクロ整形	緻密	内 外：2.5YR5/1 黄灰	優良	胡 西 窯 産、4 期 胡半 a
10	2 区ベルト一括	須恵器	蓋	口縁部片	— (1.0) (6.2)	17.1	坏受け部は屈曲する。	ロクロ整形	緻密	内 外：2.5Y6/1 黄灰	優良	外 面 黒 鉛 灰 釉
11	表土一括	陶器	高台皿	底部片	— (1.7) (9.4)	34.1	作り出しの三日月高台	底部静止糸切後ナデ	白色粒子、赤色粒子	内 外：2.5Y7/2 灰黄	優良	
12	表土一括	陶器	大甕	胴部片	—	29.5	口縁部直立気味、胴張る形		緻密	器 内：5 Y 7/1 灰 内：10 R 2/1 3 極暗赤褐	良好	常 滑 焼 内 外 自然釉
13		土製品	円盤型土製品	完形	縦 3.9 横 4.4 厚 1.3	21.3	高台坏の底部を打ち欠き円形を形成している。	底部内面ヘラミガキ、黒色処理 底部外面ナデ	やや緻密		良好	

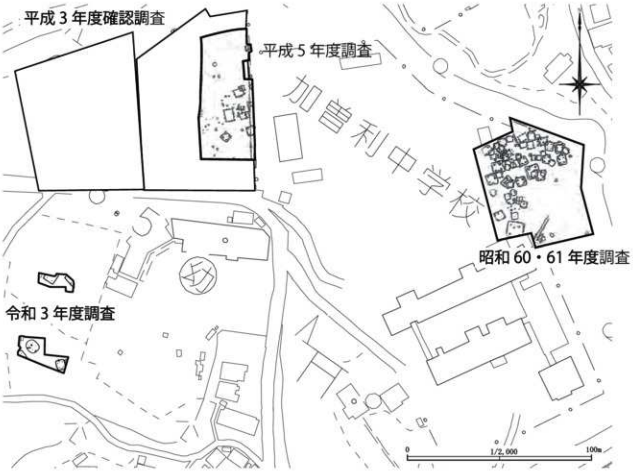
第４章　まとめ

本遺跡の立地する都川北岸の台地上は、古くから加曽利貝塚をはじめとする縄文時代の遺跡の宝庫として有名である。1970 年代には空港関連事業として京葉道路建設など、遺跡周辺の調査が進められ、とくに古墳時代以降の遺跡の実態が明らかになってきた。こうした過去の立木南遺跡調査例などから、この広大な遺跡（遺跡範囲：約 80,000 ㎡）（注１）の一端を概観しておきたい。市域を東西に貫いて流れる都川本流には、星久喜あたりで仁戸名支谷・坂尾支谷や北からの小流（加曽利支谷）が合流する。そこから 600 mほど北に位置して立木南遺跡がある。遺跡の範囲内には東に加曽利中学校が、西の桐葉学園加曽利幼稚園、南の溜れ谷に面して貴船祠が所在し、今回の調査区はこの祠に対面した南西の台地上である。

今回の調査では、竪穴建物跡５棟と土坑１基が検出された。その内訳は弥生時代後期～終末期２・古墳時代中期１・古墳時代後期２（土坑１を含む可能性あり）である（注３）。

SI02 は７m級の“胴張隅丸長方形”プランで、伴うものとして２点の甕がある。口径 20 ㎝、幅３㎝の口縁帯が廻り、頸部に「ｓ」字状結節文を有すものもある。SI05 の破片資料と併せ、弥生時代後期とした。

SI03 は６m級、SI04 はより大型の竪穴住居跡で、主軸も近似し、近接する。伴出する土師器のうち SI04 の球形胴の甕・複合口縁帯を有す壺・小型壺（坩形含め）・円柱状脚部の高坏など古墳時代中期前半の特徴が窺われるが、SI03 の長胴化し始める甕との間にやや時期差を認めることができよう（５世紀代）。



SI01は5m級の竈を有す竪穴建物跡である。土師器甑・甕はこの地域で一般的にみられる古墳時代後期の所産であるが、“湖西産”須恵器長頸瓶や“新治産”須恵器坏を伴出することから終末期に比定されよう（7世紀第4四半期）。

3回（注2）の本調査を通じて調査された竪穴建物跡56軒・掘立柱建物跡20棟を総合すると集落の展開は、弥生時代終末期に西南部の2軒から始まる。古墳時代に至り、前期に南東部4軒へと拡大し、5世紀代に比定される今回調査の2軒へと続くが、現段階では6世紀代に顕著な遺構は認められず、7世紀後半に小規模ながら西南部と東南部に集落が営まれる（注3）。

その後奈良時代には14軒が確認され、遺跡中央部から北部へと継続的に拡大し続ける。平安時代には北部を中心に21軒が集中し、最盛期を迎える。また、時期不明とされた住居跡も主軸方向から推量するに当該期に属する可能性がある。掘立柱建物跡も「奈良時代もしくは平安時代の所産として捉えられている。」（永塚1996）。1次調査で倉田氏の須恵器について述べた「須恵器の比率は、奈良時代中頃から高まり始め、平安時代前半には盛期を迎え、その後急速に減少することが指摘出来る」という指摘は集落の展開そのものに当てはまる見解である。

注

1．昭和60・61年に調査された際の遺跡名は「加曽利中学校遺跡」（抄60・61）とされている。

2．平成3年度確認調査時に1軒調査されたことを付け加えておく。概要に「調査対象区の大半が削平と攪乱を受けており、南側から2.35m×3.05mの平安時代の住居跡1軒を検出したに過ぎない。」とある。

3．今回の確認調査により調査範囲中央に検出した竪穴住居跡（古墳時代後期ヵ）については、現状保存とされた。

参考文献

1973　三森俊彦　種田斎吾他『京葉』千葉県都市公社

1987　千葉県教育庁文化課『千葉県文化財発掘調査抄報‐昭和60年度‐』千葉県教育庁文化課

1988　千葉県教育庁文化課『千葉県文化財発掘調査抄報‐昭和61年度‐』千葉県教育庁文化課

1988　倉田義広他『立木南遺跡』財千葉市文化財調査協会　千葉市教育委員会

1993　財千葉市文化財調査協会『財団法人千葉市文化財調査協会年報5‐平成3年度‐』財千葉市文化財調査協会

1996　永塚俊司・鈴木眞友美『立木南遺跡』千葉大学文学部考古学研究室

写真図版

1．1区完掘状況　上が南

2．2区完掘状況　上が北

1. SI01　完掘状況　南から

2. SI01　Aセクション　東から

3. SI01　Bセクション　北から

1. SI01 竈　完掘状況　南から

2. SI01 竈　Bセクション　南から

3. SI01-P1　完掘状況　西から

4. SI01-P2　完掘状況　西から

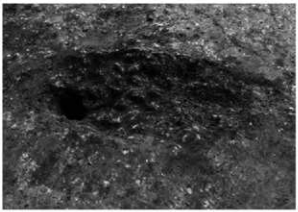
5. SI01　掘方完掘状況　南から

1. SI02　完掘状況　南から

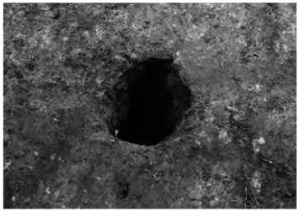
2. SI02　Aセクション　東から

3. SI02　Bセクション　北から

1. SI02　検出状況　北から



2. SI02　炉　完掘状況　西から



3. SI02-P1　完掘状況　西から

4. SI02-P6　完掘状況　西から

5. SI02　床下ピット完掘状況　南から

1. SI03　完掘状況　南から

2. SI03　Aセクション　東から

3. SI03　Bセクション　東から

1. SI03　検出状況　西から

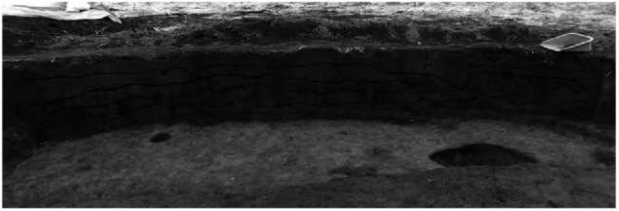
2. SI03　遺物出土状況　南から

3. SI03-P3　Aセクション　西から

4. SI03-P4　Bセクション　西から

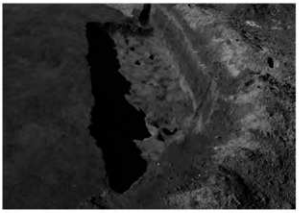
5. SI03　掘方完掘状況　東から

1. SI04　完掘状況　東から



2. SI04　Aセクション　南から

3. SI04　検出状況　南から



4. SI04　掘方完掘状況　東から

1. SI05　完掘状況　東から

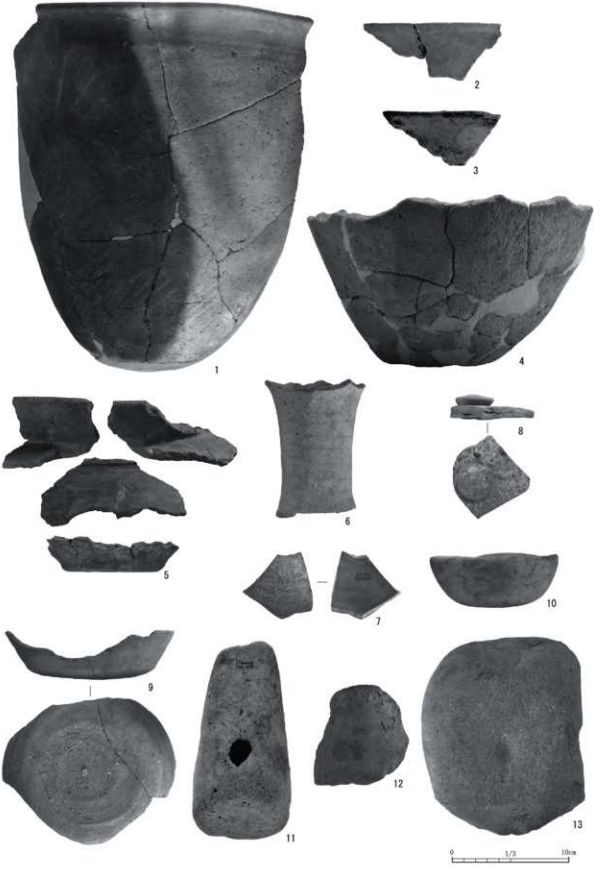
2. SI05　遺物出土状況　東から

3. SK01　完掘状況　東から

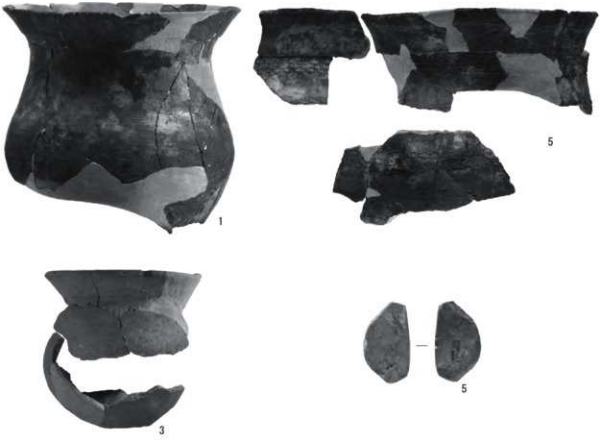
4. １区基本層序　東から

5. ２区基本層序　東から

SI01 出土遺物



SI02 出土遺物



SI03 出土遺物

SI03 出土遺物

SI04 出土遺物

SI04 出土遺物

SI05 出土遺物

遺構外出土遺物

抄　録

ふりがな	ちばしたちきみなみいせき
書名	千葉市立木南遺跡
副書名	令和3年度発掘調査報告書
編著者名	谷　　旬　大賀琢磨
編集機関	千葉市教育委員会 株式会社勾玉工房
発行機関	千葉市教育委員会 〒260-8722　千葉県千葉市中央区千葉港1番1号
発行年月日	2023(令和5)年 9月29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
立木南遺跡(たちきみなみいせき)	千葉県千葉市(ちばけん ちばし) 若葉区加曽利町(わかばく かそりちょう) 954-3他	12104	3127	35° 36′ 49″	140° 09′ 35″	2021.10.25 ～12.10	470㎡	住宅造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
立木南遺跡	集落	弥生時代 古墳時代	竪穴建物跡2軒 竪穴建物跡3軒 土坑1基	縄文土器、弥生土器 土師器、須恵器 土製品(支脚) 石製品(石皿)	

要約	立木南遺跡における過去の調査時事例に新たに弥生時代終末期集落の一端が明らかになり、弥生時代から平安時代まで連綿と続く広大な集落跡であることが窺える。

千葉市立木南遺跡

— 令和3年度発掘調査報告書 —

2023年9月 29日 印刷
2023年9月 29日 発行

編　集　千葉市教育委員会
〒260-8722 千葉県千葉市中央区千葉港1番1号
℡043（245）5962

株式会社 勾玉工房
〒286-0211 千葉県富里市御料1009番地28号
℡0476（92）0658

発　行　千葉市教育委員会
〒260-8722 千葉県千葉市中央区千葉港1番1号
℡043（245）5962

印　刷　株式会社 エイティー
〒289-1115 千葉県八街市八街ほ1231番地
℡043（444）2024